

# 「変えるしかない。楽しいから続けられる」

## フロントランナー

Front Runner

(1面から続く)

### 猿田 佐世さん 新外交イニシアティブ代表・弁護士

—小学生時代から人権に関わる仕事をしたかったそうですね。

よくした。中高時代の体験は私の基礎になっています。恵まれた環境でした。

熱心に話を聞いてくれた。目指す方向は間違っていないと確信しました。自分の原点となった体験です。

で、政府や企業関係者、メディアなどでした。ある会場で日本のテレビ局が多く日本人を含む来場者があるか」と、アンケートを行っている。「今後の日米関係はどうなるか」と「悪くなる」「悪くならない」の二択で「悪くなる」と答えた人が圧倒的に多かった。当時の日本の世論調査の高い支持率と温度差があったが、それが「ワシントンの人々の声」として報じられていくのを知った。

要で、シンクタンクからの発信なら米国内でも聞いてもらえると思ったからです。ワシントンの対話では、反対だけではダメ。どうしたいのか、具体的な政策を提案しなければ相手にしてもらえない。

小学4年の頃、ユニセフ親善大使の黒柳徹子さんが抱く飢餓状態のアフリカの子どもたちをテレビで見ただけで、国連を知り、働きたいと思うようになりました。育ったのは管理教育が厳しい愛知県。大学で教える両親はそんな教育を批判していた。ふたりの背中を見て育ったことは大きいです。中学校は愛知教育大付属へ。自主性が重んじられ、何をすることも自分で考え、議論して決める。高校は千種高校。自由に討論を

—ワシントンではどのように日米外交の仕組みに気づいたのですか。

「対米従属」だけでなく、日本は米国の手を出せないことにも関わったり、米国に対してより強硬な外交政策を求めた。

—いま、日本が軍事的に拡大路線を突き進むなか、講演では「戦争を回避せよ」と訴えています。

### 具体的に提案

法試験に合格。司法修習を延ばしタンザニアの難民キャンプへ行かれたとか。学生時代から10年間、国際人権NGOアムネスティ日本でボランティア活動をしました。4年間、総会議長を務めたことも。でも、自分には人権、人権と言っているがきれいな事ではないかと思ってしまう。人権などないような場面でその言葉は役に立つのか、見てみよう。ところが、タンザニアの難民の高校で人権の授業を行うと、みんな本当に

「対米従属」だけでなく、日本は米国の手を出せないことにも関わったり、米国に対してより強硬な外交政策を求めた。

—希望をもって活動されていますか。

—いま、日本が軍事的に拡大路線を突き進むなか、講演では「戦争を回避せよ」と訴えています。



ドイツと米国のシンクタンクの研究者とG7広島サミットに向けての打ち合わせをする猿田佐世さん（中央）＝東京都港区

—ワシントンから日本を変えていく発想ですね。そうですね。ワシントンを変えるのは難しい。私のできることはわずかにすぎない。でも日米安全保障政策に大きな影響をもつ知日派と言われる人は5人から30人くらい。ワシントンを少しでも変えられれば日米外交は大きく変わる。

—希望をもって活動されていますか。

### プロフィール

- ★1977年、東京都生まれ。2歳で愛知県へ。小学6年のころ、「国連で働きたい」という夢をもつ。中学生から器械体操を始める。写真は中学時代。
- ★95年、早大法学部入学。NGOアムネスティ日本で活動。
- ★99年、司法試験に合格。タンザニアの難民キャンプなどでボランティア活動を行う。02年以降、弁護士として人権に関わる案件を担当。
- ★07年、ニューヨークのコロンビア大ロースクール入学。ニューヨーク州弁護士資格を取得し、09年にワシントンへ。アメリカン大大学院で国際関係学を学びながら、日本の多様な声を米国へ届ける活動を始める。
- ★13年、東京で「新外交イニシアティブ」を設立。毎年、ワシントンを何度も訪れ、米政府や議会への働きかけを行う。
- ★家族は弁護士の夫と6歳、10歳の男の子。
- ★立教大学非常勤講師も務める。著書に「新しい日米外交を切り拓く」「自発的対米従属」など。



◆次回は、車いすテニスの小田凱人選手。16歳の若さで1月の全豪オープン男子シングルスで準優勝。6月の全仏オープンで初の4大会優勝が期待されます。